

☆協会役員会開かる

☆友愛会 統一選後に解散、再編

☆日婦の会新会長に大石氏

第49号 1999年1月1日

(平成7年3月17日第三種郵便物認可)

月刊

# 民社

発行 民社協会

編集発行人 梅澤昇平

〒105-0003 東京都港区西新橋1丁目20番9号  
和田ビル4階

TEL (03) 3501-5111 毎月1回1日発行

購読料 年間 2,000円

(会員の購読料は会費の中に含む)

産経新聞論説副委員長

花岡信昭

## 当面する政局をどう読むか



### ■小渕政権“大化け”の可能性

小渕政権は発足したとき、短命・暫定政権と言われた。しかしここへ来て少し様相が変わってきている。意外としたたかで、すぐに倒れるようなヤワなものではないという見方が強まった。むしろ“大化け”の可能性すら感じさせる。

自民党は派閥連合体だが、小渕政権は、派閥の長が順当に総理・総裁になるという意味で、久しぶりの“自民党らしい”政権だ。これは自民党的な伝統・秩序・美学からして、「収まる場所に収まった」ということだ。そういう思いが、小渕首相自身にも自民党の中にもある。この雰囲気というのは見逃せない。もう一つは、自民党で次を狙う加藤・山崎というYKKの二人が直ちに小渕政権に対して反主流の立場をとらず、梶山氏もピンチヒッターでの登板しかあり得ないだろうということから、党内に倒閣勢力がない。人事の面を見ても、堺屋経企庁長官や宮沢蔵相起用など、批判しにくいメディアでさえ「実務型内閣」というまずまずの評価を下した。しかも次の次あたりの政権を狙う世代をさりげなく配している。

参院選敗北後にできた小渕政権は「金融関連法案は民主党案を丸呑みしなければ二進も三進もいかない」と言われたが、逆に金融問題さえクリアすれば、この政権は大化けするというのが当初の私の見方であった。いまの状態は“中化け”くらいではないだろうか。

### ■自自連立と菅流ポピュリズムの限界

そしてここへきて「自自連立」が合意された。自民党は小渕首相の発言で流れが固まった。小渕首相が指導力を発揮し、小沢党首との会談で突きつけられた政策提案を党首間で呑んで連立合意に至った。

小沢氏の転換は、はっきり言えば菅直人という政治家の限界に見切りを付けたということだろう。すなわち菅代表は、首班指名選挙で自由党が1回目から菅氏に票を入れ、参議院で“菅首相”が誕生したことの重みを理解できなかった。本当の政治家ならそこで一気に動き、政権を倒すことも可能だった。しかし菅代表は「金融問題を政局に絡めない」という筋論からそれをしなかった。そして出現したのが“政策新人類”だ。朝日新聞などはこれを「政治家が前面に出て官僚主導を排した」と非常に高く評価した。確かにその面は否定できない。しかし結局は、本来役人がやるべき行政の細かな点まで政治家が手を出し、大局を見失ってしまったということではないか。

菅氏の最も大きな問題は、そのきわめて稀薄な国家意識だ。「平和憲法があるから日本は戦争に巻き込まれない」という観念的平和論ならいつまでも通用しない。例えば北朝鮮のテポドンが日本上空を飛び越えた。北朝鮮情勢がい

よいよ危なくなってきたとき、日本国家の存立を求めるのなら、その指導者が極限で迫られるのは開戦の決断だ。おそらく菅直人という人にとって、そういうことはおよそ遠い存在で、菅氏は、そういう意味でのポピュリズム、大衆迎合主義ではないだろうか。口では「小さな政府」と言っているが、実際は政策的には大きな政府だ。西欧社会民主主義でも、昔のような大きな政府から、小さな政府を取り込みながら変革してきている時代である。

一旦は菅氏に乗った小沢氏が転換したのは、そうした限界を感じたからではないかと思う。小沢氏のかねてからの問いかけは「今までの日本のシステムで、これから迎える大競争時代に通用するのか」ということだ。小選挙区制導入で二大政党制にするというのはそこから発している。この方向は正しいと思う。失敗したら選挙で鉄槌を受けて政権交代が行われる。日本的ではないが、そのくらいの構えがなければこれからの世界で日本は生き残れない。

### ■真の政界再編へとなりうるか

ではそのときの対立軸は何か。小渕・小沢連立ができて再結集した保守と、もう一方に菅流の保守中道・リベラルというものが出てくるのではないかと。そしてだんだん二極構造ができていけば理想的な展開となる。現在の二大政党は「資本家階級の政党と労働者階級の政党」という時代ではない。アメリカの共和党と民主党、イギリスの労働党と保守党も、政策にさほど違いはない。それぞれが相手のよいところを取り込み、魅力ある党首を担いで政党のイメージを打ち出していけばよいのではないかと思う。もし自自連立がそこへ向かっての引き金であるとすれば、歴史的な転換点になる。したがってこれは単なる数合わせという面だけに矮小化すべきではない。これがもたらすこの先の動きが、本当に新たな再編へと展開していけば、面白いことになる。

自民党は参議院で過半数を割っているが、彼らにとって10議席を埋めるのはわけのないことだ。経済・景気・金融情勢もわずかながら明るさが見えてきた。そうするとこのまま選挙なしで、衆参で過半数を確保した安定政権になる。そして総裁選再選が確定すれば、この政権は大化けするかもしれない。自自連立には、小渕長期政権への展望とYKK外しが窺える。このように、自自連立のもたらす余波は軽視できないものがある。

これに対して民主党は、このままいけば党大会で菅代表再選は間違いないと言われている。菅氏は女性問題、自自連立で先を越されたことなど、おそらくいま最大の逆境にある。民主党の中で党首選が行われないというのは非常に残念だ。何の議論もなく、誰も立たず、当面の政局・政策その他の総括を十分しないままでは、先細りになるのではないだろうか。

12月10日 月例研究会より (要旨)